

宮古島市立教育研究所

所報

第6号 2012年3月発行

発行者 宮古島市立教育研究所
所長 與儀 千寿子
住所 宮古島市下地字上地472-39
宮古島市下地庁舎3階
電話 0980(76)6400 FAX(76)6154
<http://www3.city.miyakojima.lg.jp/kenkyusyo/>



教育研究所の使命 ～教師の指導力向上をめざして～

所長 與儀 千寿子

時の経つのは速いもので、平成23年度も晦日を迎えました。4月に第10期の研修生（宮古島市立西城小学校、福原保教諭・・小学校理科）、10月には第11期の研修生（宮古島市立久松小学校、上田達大教諭・・小学校国語）を受け入れ、無事に研修を終えることができました。また、心因性の不登校の児童生徒のための「まていだ教室」や「教育相談室」も無事1年間を乗り切ることができました。これも各小中学校の校長先生や先生方、多くの専門機関や関係者、地域の方々の言葉に尽くせぬご厚情のお陰だと深く感謝申し上げます。

長期研修に関しては、資料不足を琉球大学との連携や宮古教育事務所との連携等で補い、研修生の教育への情熱と研究への意欲で乗り切った1年でした。それは、私にとっても共に学び新しい知識を習得する喜びに満ちた時間でもありました。また、各種研修会の度に各学校に訪問する機会もあり、先生方の授業改善に対する意欲溢れるお姿に接することができたことも収穫の1つです。学校現場で真摯に学ぶ教師集団の存在は実に頼もしい限りです。

不登校の児童生徒に対しては、「人と人との関わり」がいかに大切かと言うことを再認識させられる日々でした。心因性の児童生徒にとって「人間関係づくり」が困難であることを教えられ、成長過程での家庭の存在意義、大人の存在意義をあらためて問う時間でもあり、「心因性」という言葉に対する認識を深く持つことの重要性に思い至った時間でもありました。人の

心は見えません。だからこそ、「～ねばならない」という物差しで測れないし、安易に図ってはならないと思います。学校は児童生徒一人一人が大切にされなければいけない場所です。教師にとっても多くの個性との出会いの場所です。その出会いを大切にできうる限りの時間を子供たちのために割いていただきたいと思います。

さて宮古島市立教育研究所は満6年を終えます。その間、11名の研修生の実績を積み重ねることができました。小さな離島においても、世界に情報ネットが広がる今日、情報収集力は中央と引けを取らなくなり、教師にとっても学びやすい環境が準備されています。しかし、じっくりと腰を据えて教育課題について研究し自分なりの方向性を見つけるには多忙な日常では厳しいです。教師の指導力の向上や教育課題の解決にとって長期研修はとても重要な研修です。その意味でも教育研究所の存在は大きいと確信しています。これから伸びゆく教師たちの「研究の砦」として、資料等の充実を図りながら、宮古島の教育を牽引していく指導力の高い教師を育てていくことが研究所に課せられた使命だと思います。

本研究所はこれまで、宮古教育事務所、琉球大学、各専門機関、地域の方にご指導ご支援をいただきました。これからも本研究所への変わらぬ御厚情を賜りますようお願い申し上げます。

長期研修を振り返って



第10期研究員
西城小学校 福原 保

昨年度、採用10年目を迎えた私は、本年度教員生活の次の10年をどう生きていくかを考える節目に立っていました。そして、「もう一度初心に返り新たな歩みを始めたい。」との思いから、宮古島市教育研究所の扉をたたきました。

本研究では、子どもが主体的な問題解決の活動を行うために必要な「見通し」に焦点をあて、「見通し」をもつためには、その根拠となる情

報をどのように位置づければよいかを出発点に研究を行いました。その中で、自分自身の授業づくりに対する意識の転換と、授業の質を向上させる学習展開のヒントを手にすることができました。同時に、研究の過程において、多くの著書や研究論文に触れるたびに、そのすべてから子ども達の未来を思う情熱を感じ、今後の道筋を見つける事ができました。

研究所においては、研究に関する様々な示唆を頂いて、一步ずつ前に進むことができました。研究を終えて現場に戻った今、教師という仕事がいかに魅力的なものかを、改めて実感しています。研究を支えて下さったすべての皆様への感謝を胸に、今後も日々研鑽を積んでいきたいと思ひます。



第11期研究教員
久松小学校 上田 達大

私が、この研究をスタートさせた当時は、「国語の教材にどういう視点で取り組んでいくべきか明確にしたい。」という確固たる課題を持っていました。与那覇湾を眺望でき、広くゆったりとした素晴らしい研修室は、研究を進めていくのに勇気を与えてくれる環境であると共に、自分が何を求めているのか、授業をすることはどうということなのかを根本から見つめ直す孤独な環境でもありました。確固たる課題を持っていたはずですが、時には白い砂漠の中に一人ぽつんと立ち（研修室は白くてさわやかなのである）、これからどこに進むべきか迷いそうな不安を感じたこともありました。しかし子供たちとの授業のやり取りの中で、彼らの発問に対する反応を愉しんだり、千寿子所長や修先生と教育や授業の話をしながらかん感したりすることで、自分の課題に対するアプローチを時には変更し、時には確信しながらここまで来ることができまし

た。

私の課題や教育に対する根本の問いは、私の中に独立してあるわけではありません。子供たちとの授業を通して、先輩、後輩との教育に対する考えのやり取りの中で、明確に現れてきます。宮古島にいた8年間、様々なことを勉強することのできる道のりでした。それらの道は私が生み出したものではなく、子供たちや周りの先生方が示してくれたことに気づくことができました。さらにこの研究を行うことによって次の新たな課題を見いだすこともでき、私にとっては大きな収穫となりました。これからも、子供たちがわくわくしながら文章と向き合っていけるような授業を目指し、研鑽を積んでいきたいと思ひます。

最後にこのような貴重な研修の機会を与えてくださった宮古島市教育委員会の皆様、ご指導下さった与儀千寿子先生、砂川修先生、検証授業の協力を頂いた久松小学校の根路銘和子校長先生をはじめとした先生方に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

「まていだ教室」より

まていだ教室の担当になり、もう2年目が終わる。

一昨年は、心因性の不登校児童生徒との信頼関係をどうしたら築くことができるのかという課題に、その子の顔色や一挙一動を観察しながら言葉かけに迷う毎日だった。また、まていだ教室へ重い足取りで通う児童生徒の胸の内はどういうものなのか、また保護者にとってもその子を支えるためにどんなに悩んでいるのか、当事者しかわからない気持ちを少しでも理解したい、寄り添いたいという気持ちだけで精一杯だった。

一人一人を支援するためには、まず個々を理解することが必要である。しかし、いろいろな背景と複雑な原因が絡み合っているせいなのか、理解し難い事などが多々あった。情緒の安定、行動の変容と段階を経てもう少しというところで逆戻りしたり、予想できないことや思いに反することがあったりした。一人一人をいかにどう支援すべきか悩み、学校、家庭をはじめ各関係機関と数多く話し合ってきたが、心因性不登校の児童生徒一人一人を理解することがどんなに難しいかを痛感する毎日であった。

今、思うことは、学校現場において「不登校はどの子にも起こりうる」という視点を持ち、子ども達の小さな変化を見逃さないように心がけることが何よりも大切だということだ。やや

もすると、知らず知らずのうちに見逃してしまいがちになるからである。また、不登校の「こころ」のサインに気付いたらすぐに対応し、本人や保護者、児童生徒同士の信頼関係を再構築することの大切さも改めて学ぶことができた。決してあせらず、じっくりと根気強く子ども達と向き合っこそ、何らかの解決策が前進すると考える。

これまでいろいろな出会いや忘れられない出来事があった。振り返ってみると、何よりも子ども達によって気付かされ、教えられ、学ぶことができ、よい経験になった。子ども達と関わっていく中で、少しずつ変容し、さらに学校へと足を向けたときの喜びは何にも代え難い気持ちである。この2年間の中で、うまく学校復帰できた子ども達、そして現在部分登校できる子ども達、それは各関係機関等の連携・協力のおかげである。教育研究所の與儀千寿子所長のご指導・ご助言をはじめ、宮古島市教育相談員の方々が温かく見守り、共に育ててきてくれたことがまていだ教室にとって大きな支えであった。

この経験を活かし、これからもきめ細かな学習指導と生徒指導、教育相談や特別支援教育に取り組んでいきたい。

指導教諭 亀川典子
指導員 前川尚代
指導員 砂川さつき

「教育相談室」より

静かな湖畔を思わせる与那覇湾から暖かい風が吹き、ポカポカ春の陽気を感じ、卒業と進学、別れと希望の入り交じる複雑な思いのする季節を迎えました。ここ教育相談室にもこれまで関わった生徒が義務教育を終え、高校合格のうれしい知らせの喜びとそうでない生徒「これからどうするのだろうか」との思いがあります。何れにしても関わった生徒のこれからの活躍と幸福を願わずにはいられません。

さて、この1年間、それぞれに悩みを抱える児童生徒や保護者と関わる中、宮古地区教育相談連絡協議会等を通して相談員としての研鑽を積み、情報交換、情報の共有化を図りながら相談業務に取り組んできました。不登校になりかけた生徒が、毎日登校できるようになったことは相談員にとってこの上ない喜びでした。

また、今年、児童の安全確保のために学校での支援を行ったり、保護者と学校間で起きた問題に対しては、双方の話をじっくり聞き、それぞれの思いを伝える役目を担い、お互いが理解し合い、歩み寄る方向へと手助けする事ができました。このように様々な相談に対応して相談者の力になれるよう努めてきました。

教育相談室では、これからも相談者の守秘義務を守り、親身になって熱心に対応する所存ですので気軽に来室、電話相談をして頂ければと思います。

「一人で悩まず気軽に相談を、早期解決に向けて」

教育相談室

(狩俣芳子 立津和代 宮平幸子 宮國芳美)

研修事業

多くの方が研修会に積極的に参加して頂き、有意義な研修会を実施することができました。また研究・研修会の講師をして頂いた先生方には、心から感謝いたします。

今後も学校現場のニーズにあった研修を企画していきたいと思っております。

研究教員の研修（入所研修）

2人の研究教員が自己のテーマについて半年間の研究を行い、課題解決に取り組んだ。検証授業（公開）や研究成果報告会を通し、研究の成果を多くの教職員と共有し合い、指導改善へ役立てることができた。

○第10期（H23. 4. 1～9. 30）

福原保（西城小学校）～理科～

研究テーマ：見通しをもって問題解決に取り組む理科授業の工夫～演繹的な手法による学習展開を通して～

○第11期（H23. 10. 1～H24. 3. 31）

上田達大（久松小学校）～国語科～

研究テーマ：論理的な思考を培う読解指導の工夫～文学・説明文における読解の条件を探る～



10期検証授業（7月）



11期検証授業（1月）

夏期研修会

■表計算ソフト「エクセル」活用研修

（8/8 鏡原小）

下地辰彦教諭（鏡原小）を講師に実施。29の方が受講、演習を通して「エクセル」の操作を学んだ。



【内容】

- ・エクセルの基本的操作
- ・表作成
- ・基本的な関数

■記憶につながるノートづくり

（8/17 中央公民館）

県立総合センターの高木眞治（教科研修班研究主事）による出前講座を実施。参加者（55人）は、教材研究ノートや板書計画など実践事例を通してノートづくりについて学んだ。



【内容】

- ・思考の過程が分かるノートづくり
- ・予習、復習へつながるノートづくり

授業づくり研修会

■小学校における「伝統的な言語文化」の授業づくり研修会

（6/27 下地庁舎）

與儀千寿子研究所長を講師に、新指導要領で新しく指導内容として加わった、小学校における俳句や短歌の指導について理解を深めた。



琉球大学教育学部との連携事業

■研修会に講師招聘



上野小学校や北小学校の授業研究会、理科研修会等に計11回、講師を招聘し有意義な研究会を実施できた。

（6/2 理科研修会）